

# 選考をふりかえって

「読書体験記部門」高校生の部 選考長 中西 進

「太郎の恋が実るまで……」は、手だれの文章であった。筆者は冒頭、朝食で魚の小骨が喉に刺さった体験を示したのち、屠殺工場で働く人々への差別を描く絵本が、家庭科の先生から示されたことに生じた人間への差別を、小骨が刺さった例として、持ち出す。差別を扱った書物の読書体験記は、この準備の上に提出されるという段取りである。

そこで差別への誤りを力強く断言し、生温い環境で甘やかされている自分に痛みを覚え、この素直な怒りを忘れずにいようと述べる。まるで喉に刺さった小骨をそのままにしていこうようにと、冒頭と首尾をととのえながら。

みごとであった。この整えられた文章は、主題の明確な理解を示すものといってもよいだろう。単なる文章の技法にとどまるものではない。

もし「最優秀」という概念が二つの作品に可能なら、もう一つのそれに推したいものが「反比例と青春」であった。

筆者は書物の主人公をうらやましく思う反面、軽蔑したくなる自分という関係から出発して、書物の主人公の考察の中に、青春の特性としての矛盾する二つの物を見出す。それを「反比例」という名でよびながら、主人公をわが伴走者と見なす。そして、主人公は自分を悩ませながら、一緒に「反比例」を探してくれるだろうと、思う。そのことが自分を明日への挑戦者とする、というのだ。

これまた心憎いほどの読書ぶりであった。

そしてもう一つ、つけ加えておきたいことがある。

すぐれた読書体験記の一つに、迫力のある、内容の高度な文章ながら、およそセンテンスは長く、段落を切ることも少なく、センテンスの中にほとんど読点を使わないものがあった。

独特の文体といってもよいが、はたしてそう言うだけでよいのかと、わたしは迷った。やはり現代の文章には、通常使われる記号や約束で整理された論理が、要求されるであろう。わたしは、『源氏物語』の文体が、今日の文体として適切か否かを考慮しつつ、十分この魅力ある文体の味も活かせる、整頓された文体を作り上げてほしいと思った。